

中国民話の旅から

雲貴高原の稲作伝承

伊藤清司



中国民話の旅から

雲貴高原の稲作伝承

伊藤清司



NHKボックス

474

伊藤清司 (いとう・せいじ)

1924年 岩手県に生まれる
1947年 慶應義塾大学文学部卒業
現 在 慶應義塾大学文学部教授
慶應義塾大学言語文化研究所所長
専 攻 民族学・中国史
著 書 『かぐや姫の誕生——古代説話の起源』
『花咲爺の源流——日本と中国の説話比較』
『日本神話と中国神話』
『中国・日本民間文学比較研究(在華学術報告集)』
他

NHK ブックス 474

定価 750 円

中国民話の旅から——雲貴高原の稲作伝承

昭和 60 年 2 月 20 日 第 1 刷発行

〈検印廃止〉 著 者 伊 藤 清 司
発行者 藤 根 井 和 夫
印刷 三 秀 舎
製本 明 泉 堂
装幀 桒折久美子

発行所 日 本 放 送 出 版 協 会

東京都渋谷区宇田川町 41-1
郵便番号 150 振替東京 1-49701

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

ISBN4-14-001474-1 C 1339 ¥ 750 E

目次

序 日本文化のルーツをめぐる

第一章 歳末の花溪から——「大歳の客」型説話との出会い

花溪への旅・6 「大歳の客」のルーツがある・8 『風土記』に描かれた「大歳の客」のモチーフ・9 「大歳の客」型説話を求めて・12 布依族の「黄金とお客と」・13 布依族の「この世に降った神仙」・16 壮族の「お盆」杯の馬の糞・19 布依族の「黄金の帯」・21 長崎県壱岐島に伝わる「宝手拭」・23 苗族の「神仙老人の手拭」・25 水族の「二人の嫁」・28 西江下り・30 瑶族の村を訪ねる・31 「銀を授けたお婆さん」・34 猿になった長者・36 瑶族の「猿の尻はなぜ赤い」・38 中国各地に伝わる「猿の尻の赤いわけ」型説話・40 変わりゆく部分と変わらぬ部分・41 変容する少数民族の説話・伝説・43 漢族にも多い「大歳の客」型説話・45 見え隠れする神の姿・47 神の現われかた・48 神が現われる時期・49 東郷族のイスラムの祭りに来訪する客・50 イスラム教義が先か民間説話が先か・52 中国では問題にされない来訪の時期・53 神聖な晩になぜ死が語られるのか・54 寢床の客人が金銀に変わる・56 物的なほうびは後の加工か・58 神意に叶ったものだけが生き残る・59 「洪水神話」とのつながり・61 「好客人」の生きる村・63

第二章 田植え時の棚田に立って——「嫁殺し田」型説話の背景

四季如春、一雨成冬・66 天无三日晴、地无三里平・67 「大きな米」の伝説・69 伝説にこめられた懐旧の思い・70 よんどころなき移住・72 少数民族の遷徙を語る伝承・73 「田植えはじめ」のきびしい仕来り・74 儀礼のバリエーション・75 「姑娘田」と「磨子田」と・77 わが国の「嫁殺し田」との類似・79 嫁が田で死ぬ布依族の「姑娘田」・80 雲貴高原に伝わる「妹田」説話・83 布依族の「媳婦田」・85 鴨と娘と・86 開秧門儀礼とのかかわり・88 田植え競争のモチーフ・89 田植えと女の死・90 ハイヌヴェレ型の農耕起源神話・91 水仙の起源伝説の意味するもの・92 「嫁殺し田」と「長者の日招き」・93 柳田説への疑問・94 神を祀る田圃の形・96 祭祀儀礼の行なわれる場・97 神々の標徴Ⅱ田圃の中の石と塚・99 わが国の田植えはじめ儀礼との類似・100 樹上の白い石にこめられた大米への願い・101 神の「依り代」としての木と竹・104 さまざまな「テイ・カ・フィ」・102 白刺が儀礼や呪術に使われるわけ・105 田植えとタブー・106 身をけずる田・108

第三章 松明祭りの雲貴高原をゆく——虫送り習俗との関連

雲貴高原にひろく伝わる火把節（松明祭り）・110 松明祭りの開催時期・111 大理に伝わる火把節の起源・113 南詔国王と慈善夫人にまつわる異伝・114 「遊海会」とのつながり・116 阿南・慈善夫人の故事と「孟姜女」伝説のモチーフ・117 蒙古族の情死伝承と松明祭り・118 納西族の情死歌「ユウペイ」・120 農耕神奉祭型の納西族跋達伝説・122 彝族系撒梅人の祖先靈奉祭型伝説・

第四章 新嘗祭の村々を訪ねて——穀物将来説と「花咲爺」の原像

123 弘法大師伝説に通ずる倭僊族の諸葛亮伝説・125 松明の火をもつて権力と対抗する・126 民間説話と創作・民話・129 彝族系諸民族に伝わる害虫退治型伝説・130 無数に広がる松明祭りの起源説話・132 松明祭りの核をさぐる・134 迎春の儀礼として・134 豊穰を祈願する・136 松明祭りと東大寺二月堂の御水取・137 松明祭りとわが国の虫送り習俗・138 虫送り行事の本質・139 虫送り習俗と実盛伝説・141 彝族系撒梅人の「祭虫山」にまつわる伝説・142 餓死した老婆の怨霊が害虫と化す・144 祭虫山における七月七日の祭祀・146 実盛伝説に酷似した祭虫山伝説異伝・148 華北・華南の蝗神信仰と劉猛將軍・151 なぜ非業の死者が蝗の將軍となるのか・152 松明祭り起源伝説と異常死のつながり・154 習俗と伝説を結ぶ糸・155

「卯の日」に催される收穫の祭り・158 雲貴高原の新嘗祭・160 新嘗祭と祖靈祭の習合・162 新嘗祭の由来を語る穀物将来説話・164 天上の穀物をとりにいく動物たち・166 壮族の由来譚——九尾のイヌ・168 水族の由来譚——小イヌの尾の先の粃粒・169 布依族の由来譚——神の洞穴・170 なぜ、イヌの手柄話ばかりが語られるのか・172 イヌの肉を食べない民族・173 石寨山出土の銅鼓上のイヌ・174 イヌを罵倒し辱しめる伝承の存在・175 イヌがもたらす作物の種類・177 イヌを祖先に仰ぐ神話をもつ人びと・180 犬祖神話とイヌの穀物将来伝承の關係・181 わが国の穀物起源伝説「弘法の麦盗み」・183 回族の「聖人と農作物の番をするイヌ」・185 弘法説話と爾旦聖人説話の共通点・186 日本の「花咲爺」と中国の「狗耕田」・187 イヌがおこす奇蹟の日中比較・189 イヌの出自を語るのが古い形・192 兄弟間の財産分けに始まる中国の説話・193 朝鮮半島に伝わる「兄弟と犬」の構造・196 日中朝三地域での相違は何に由来するのか・197 財産相

統制度と祖先祭祀・199 「隣の爺」型説話と兄弟葛藤譚・200 「花咲爺」の源流を考える・201 日
中民話の連鎖・203

終章 雲貴高原に生きる人びと——西南中国の少数民族と日本の基層文化

少数民族の移動を語り伝える「遷徙歌」・206 祖先たちの故地と南下する漢族・207 反乱と弾圧
と敗走の歴史・209 水族が伝える「漢族に田圃を奪われる話」・211 風雨橋・鼓楼が物語る侗族
の過去・212 五胡に追われた漢族の大量移住・215 先住民への圧迫と羈縻政策・217 陶淵明
「桃花源記」の意味するもの・219 桃源郷に仮託された小世界・220 『楚辞』に色濃い少数民族
の伝統文化・221 稲作農耕と操船術に長けた呉・越の実体・223 言語からみた呉・越の民族系統・
224 悠久の歴史の流れの中で・225 春秋戦国時代の民族遷徙と日本国家の形成・227 日本民族の
源流Ⅱ 湖南・雲南からの渡来人説・228 ささまざまな文化伝播・229 雲貴高原に生きる照葉樹林文
化の荷い手たち・232 旅の終わりに・233 花溪の地にふたたび・234

参考文献・237

あとがき・244

序 日本文化のルーツをめぐる

郷愁とは遠く離れてふるさとを懐かしみ想うことをいうから、生まれ故郷でもない異境に対する懐きは、これをなんと呼んだらよいのであろうか。中国には本貫という言葉がある。祖先発生の地、いつてみれば原籍地のことである。他国にあつて代々語り継がれてきた本貫の話を、聞いて育った者が、物心ついて、ぜひいちど本貫を訪ねていつて、この目でその地を確かめてみたいという気持、これもやはり郷愁の範疇に入れてもよいのではないかと思う。そういう想いを私は久しい間、雲貴高原に抱いてきたのである。しかし、だからといって、そこが私の真の本貫であり、その昔、私の先祖がその雲貴高原から、はるばるこの日本の地に移り住んだというのではない。そうではないが、とにかく、その地に郷愁のような懐れを感じてきたのである。

ところで、その雲貴高原とは、いったいどこかという、たとえば東京を基準にすれば、そこから、おおよそ三五〇〇キロメートルも離れた中国西南の奥地である。東西に延びるヒマラヤ山脈を形成する大造山帯が急に南に向きを変え、東南アジア半島部へひろがる東側の雲南・貴州一帯に走る大高原——そこがその雲貴高原である。ただし、高原といっても二〇〇〇メートル、あるいはそれ以上の高さの、起伏の激しく奥深い山地であり、そこには世界有数の大河川と無数の溪谷が走る複雑な地形を呈しており、そしてそこに、さまざまな民族が、まるでモザイク模様のように錯綜して住んでいる。



芦荳祭に集まってきた各民族の娘たち。向かって右から僂家人、黄平苗族、西家人。このうち僂家と西家は所属未定の民族。貴州省凱里県狗場にて。

漢族に対し少数民族と総称されている彼ら民族の種類は、雲貴高原ならびに隣接する四川・広西・広東各省のそれを含めると、約四〇に近い数に達する。

なかには人口一〇〇万人に達する民族もいるが、人口一〇〇万以上の主要なものだけを拾ってみると、チベット族・彝族・僂族・僂族・納西族・哈尼族・拉祜族・白族・土家族（以上、チベット・ビルマ語群）、壮族・布依族・侗族・水族・傣族（以上、トン・タイ語群）、苗族・瑶族・畲族（以上、ミャオ・ヤオ語群）、さらにモン・クメール語系かとされる仡佬族や海南島の黎族があげられる。そればかりではない。ほかに数万人の帰属未詳の民族が分布している。これだけ多数の民族が入り雑じっているとところは、おそらく世界でも稀であろう。これらの民族の伝統を守り、独自の風俗・慣習と生業を営んできた。水稻耕作を営むもの、山地で焼畑を続けるもの、狩猟採集の経済段階にとどまっていたものなど千差万別である。雲南省昆明在住の某民族学者が「雲南は世界の民族学の宝庫です」と語っていたが、雲貴高原はまさしく人類文化の博物館の様相を呈している。

さて、日本から海山を遠く距てたその雲貴地方に、なぜ、私が郷愁を抱いてきたのかといえ、ほかでもない、その地方に住んでいる人びとの中に、日本人の、あるいはわが国の民族文化の本質



貴州省鎮寧県石頭寨の布依族。華南の少数民族地区では日本人とよく似た顔が多いためか、あまり異和感を覚えない。

が——そのすべてではないにしても、日本民族・民族文化の有力な出自が、そこにあるように思われるからなのである。

ところで、いま述べた日本人とか、わが国の民族文化とかいう言葉について、少しばかり説明をしておきたい。ただし、この概念の定義については、学者の間にさまざまなかしい議論があるが、ここでは面倒なことはいっさい避けることにして、簡単に述べる。

われわれの住む日本列島に最初に大きな経済的社会的な一大変革をもたらしたのは農耕文化——とくに稲作農耕文化であり、その発達に伴って形成された住民が日本人と称している民族の根幹であり、またその文化がこの国の民族文化の基層となったものであるといつて大過はないであらう。

この農耕文化について、この際、強調しておきたいことは、稲作にしろ、これに先行する初期農耕文化にしろ、それらは日本列島内で自生した文化ではなく、海外から伝来したとみるのが今日の常識であるが、経済・社会上に大きな変革をもたらすようなその農耕文化は、単に穀物・耕法・農器具といった物質文化や技術だけではなく、それらと密接な関連をもった信仰や習俗、あるいは口誦伝承などを伴った複合文化として伝来したと考えられることである。もちろん、信

仰・民俗・説話などの民俗文化はわが国の国土で独自に発生・発展したのも少なかつたであろうが、伝来した農耕文化のうちの物質文化の側面ばかりが受容され、あるいはその跡を後世にとどめ、他の文化は拒絶され、あるいはまったく消滅してしまつたとは考えられない。

要するに、日本民族の基層文化を形成した農耕文化が外来文化であることを前提とする限り、関連する習俗等も、その源流が海外に存在する可能性を当然、考慮しなければならないのである。日本人のひとりである私をして、雲貴高原に郷愁を抱かせるのは、じつにその点に関係するのである。かねて耳にし、あるいは文字を通じて、そこに日本民族の基層文化とかわめて類型的な文化があるに相違ない、久しくそう考えていたのであるが、その本貫ともいえる土地を訪ねて、実際にこの耳で、この目で、それを確かめてみたいという想いが、私に雲南・貴州方面へ旅立たせることになったのである。

西南中国の少数民族地区にわが国民族文化のルーツを求めるこのような試みは、近年、盛んになりつつある。それらのうち、佐々木高明氏の『照葉樹林文化の道』(NHKブックス)などは、注目すべき論著であるが、それらは主として物質文化を中心にして、広い視野から、この問題を取りあげているので、ここでは雲貴高原の民間説話(神話・伝説・昔話類)を中心にした民俗採集の旅を試みたいと思う。ただし、一口に民間説話(民話)といっても、それはあまりに多岐にわたるので、今回はそれらの中から、年末から歳首に関連するもの、そして田植え時の春、ついで穀物、とくに稲の成熟期の夏、最後に収穫の秋、の四季に分けて、この地方の人びとの農耕文化に関連するものを選び、その民話探訪の旅を続けることにする。

第一章 歳末の花溪から

——「大歳の客」型説話との出会い



花溪への旅

花溪は貴州省の省都・貴陽市から東南二〇キロメートルほどのところにある谷川である。文字どおりその流れは美しく、川のあたり一帯は名だたる景勝の地で、ことに春の桃や李、それに紫陽花、白蓮など、花の盛りの頃ともなれば、ながめは格別だという。その花溪公園の奥まった高台に賓館（旅館）があり、そこからは、清冽な花溪の流れとトンガリ帽子を並べたような幻想的な山脈とを、一望に見渡すことができる。北京から快車（急行列車）で丸二昼夜、長い長い汽車の旅での貴州入りだが、この素晴らしい眺望を前にして、旅の疲れも忘れてしまうほどである。

この花溪賓館に旅の荷を解いたのは、春節（旧正月）も間近の歳の暮であった。貴陽駅からここまでの途中の歳末の町は人びとで溢れ、とくに市場は正月を迎える買物の人で活気を呈していた。その中に民族衣裳を着た少数民族の婦人たちも大勢まじっている。少数民族といえば、この花溪流域一帯には布依族の集落が点在している。布依族は、壮侬語系の言語を話す人びとで、したがって、東南アジアのタイ族とも遠い関係にある。人口約一七〇余万人、水稻農耕を営むこの地方有数の民族である。

花溪賓館の周辺にも、花溪の対岸の台地上にも、その布依の家々が並び、ここも歳の暮のせいであらう、皆せわしげに動き回っている。男たちは家の戸口で、梯子を昇り降りし、去年の暮に貼った門神や対聯を剝がし、真新しいものを門柱に飾りつけたりしている。女たちは屋内や戸外の掃除をしたり、また溪川において行って、洗い場に集まり、何やら大きな声で仲間と話し合いながら、お正月のご馳走の準備なのであらう、手をきるような冷たい水で、野菜などを洗っている。



迎春の飾りつけをする布依族。門神として書かれた秦軍・胡帥は伝説上の武将の名らしい。入口の周囲には縁起のよい文字が多い。

元旦を明日に控えた大晦日の、それも淡い陽が西の山に傾きかけた時刻であった。その騒々しい洗いの群れの中から、砧きぬたの音が響く。見ると、古い野良着などを平たい石にひろげて、棒で叩きながら洗濯をしている中年の婦人がいた。その婦人の後姿に、なぜか、ふと私は亡くなった母の面影を見たのである。毎年、大晦日が来ると、小柄な母はいつにも増して忙しげに動き回っていた。そして口ぐせにいったものである。

「一年間の汚れを残らず掃除して、きれいサッパリとしてお正月を迎えなければならない」
近寄って、砧打きぬたつその布依の婦人の口から、母が歳の暮に必ずいついていたあの言葉と、まさか同じことを聞こうとは思ってもよらないことであった。そのとき、

布依の婦人は私に、大晦日のうちに、家の中の塵芥ごみなど、汚いものはみな戸外に掃き出してしまうのだといい、そしてさらに笑いながら、こうだったのである。

「でも、一夜明けたら、もうそんなことをしてはいけない。元旦になったら、塵芥でも何でも宝物なんだから……。軒下の塵

芥だって何だって、捨てないで家の中に掃き入れなくっちゃ」

これは日本の伝統的な迎春の習俗とまるでそっくりではないか。私はそのとき、われわれが「大歳^{とし}の客」と呼んでいる昔話を想い出したのである。

「大歳の客」のルーツがある

——昔、あるところに、お爺さんとお婆さんが二人暮らしていた。ある日の夕方、一人の乞食がやって来て「一晚泊めてくれ」という。お爺さんとお婆さんは、たいへん貧乏だったので、「この家には食べるものがないが、それでもよければ泊まりなさい」といって、その乞食を泊めた。

ところが、真夜中に乞食が廁^{かわや}に行きたいというのである。二人は眠いのを起きて廁に案内すると、どうしたことだろう、乞食が廁の中におっこちてしまった。二人は汚くて臭いのを辛抱して、乞食をひき上げ、きれいに洗って、また寝かせた。

翌朝、お婆さんがお茶を沸かして、乞食に飲ませようと呼んだが、いっこうに返事がない。そこで近寄って蒲団をめくってみると、乞食の姿はなく、代わりに蒲団の中に黄金がいっぱいあった。おかげで、二人はにわかに大金持ちになった。

隣に心の悪い爺さんと婆さんがいた。昨日、汚い乞食が来て、宿を借してくれといったのを追っ払ったが、その乞食が隣の家で黄金に変わった話を聞いて、たいへん悔しがった。そこで朝早くから乞食を捜し歩いたところ、うまい具合に乞食が見つかったので、嫌だということを無理に引っ張ってきて泊めた。そして夜中に、廁に行きたいともいわないのに、無理矢理乞食を連れて行き、便所の中に押し落とした。そして二人は臭い臭いといいながら、乞食を洗ってまた寝かせ、



歳末の布依族の女たち。歳の暮はどこの婦人にとってもあわただしい。女性にまじって野菜を洗う若い男は新世帯をもった夫か。

翌朝、茶を沸かして飲ませようとしたが、返事がない。そこでシメシメと喜んで、さて、蒲団をめぐってみると、それは大変。乞食はなんと汚い糞に変わっていた。(鹿児島県鬼界島)

『風土記』に描かれた「大歳の客」のモチーフ

このように、突然やって来た見知らぬ客を親切にもてなした者が幸運に恵まれ、逆に冷たくあしらった者が不幸になるという話は、周知のように、すでに奈良時代の『常陸国風土記』や『備後国風土記(逸文)』にも載っている。

『常陸国風土記』の方は、^{おやがみ}祖神が各地の神々ところを巡り歩いて、^{するが}駿河の国(静岡県)まで来て、日が暮れたので、^{ふじ}福慈の神に宿を頼んだ。ところが、^{にやなめ}福慈の神は、その日が新粟の初嘗の晩だったので、物忌みの日であることを理由に宿を断った。怒った祖神は、つぎに常陸の国(茨城県)の筑波の神に泊めてほしいと頼むと、筑波の神は喜んで祖神を迎え入れた。そこで祖神は福慈の山には一年中雪が降り、人びとが登れないようにした。一方、筑波の山は冬も夏もたえず人びとが登り降りして、飲み食いした

中国概略図

